

## 姉妹都市提携 60 周年に当たって

高松市とアメリカ合衆国フロリダ州セント・ピーターズバーグ市が姉妹都市提携を締結してから、この10月5日で60周年を迎えます。セント・ピーターズバーグ市は、サンシャイン・シティ(太陽の輝くまち)と言われるほど気候が温暖で活力ある都市です。タンパ湾に面した美しい海岸線には、ホテルやヨットハーバーがあり、訪れる人を開放的な雰囲気ですて迎えてくれます。また、世界で有数のコレクションを持つダリ美術館を始めとしたアートが街全体に息づく「アートのまち」としても有名です。

姉妹都市の調印がされたのは、1961年(昭和36年)です。1ドルが360円の時代、まだ日本では自由に海外渡航することは認められておらず、海外旅行は庶民の夢。そんな時代に、日本からはるか遠いフロリダ州の都市と姉妹都市提携をしたのですから驚きです。記録を見ると、昭和32年に日米首脳会談で「日米新時代来る」の共同声明が発表され、高松市でも青少年に海外研究の機会を与え、夢を持たせようという機運が高まりつつあったことが後押しをしたとのこと。関係者の未来を見据えた英断に敬意を表します。

その後高松市では、1988年にフランスのトゥール市と姉妹都市提携を、1990年に中国の南昌市と友好都市提携を、2017年に台湾の基隆市と交流協定を結んで、状況に応じて各種国際交流事業を展開しています。

「国際化」と言う動きは、「高齢化」や「情報化」と共に「三化(サンバケ)」と言われ、我が国社会(自治体)を取り巻く環境変化の流れとして、1980年代から今日にかけてずっと続いています。そして、その概念はグローバリズムや多文化共生の要素を加えながら発展して来ました。

ただ、残念ながら昨年来の新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、人びとが互いに往来する国際的交流は、ほとんど見られなくなっています。反グローバリズムの流れも顕在化しています。アフターコロナの時代に「国際化」や「グローバル化」がどちらに向かうのか。国際社会にとっても、地域にとっても大きな問題です。

